

私立図書館・黄昏堂の奇跡 『図書館という場所』

「稜下村の事件って知ってる？」

廊下の奥、事務室の扉の内側から確かに聞こえたしわがれ声に、私は思わず足を止めた。この市立図書館の館長さんの声だ。

「最近朝から夕方までずっと、閲覧室に中学生の女の子がいるだろ？ あの子、稜下村の事件の生き残りなんだって。記者やってる知り合いから聞いてびっくりしたよ。この時間帯にいるってことは不登校だよな、学校に連絡すべきかなあ」

———私のことだ。

頭から血がひいてゆくを感じ、唇を噛む。補導されるといふ恐怖や後悔より、自分の過去がなす術もなく広がってゆくことに、絶望にも近い怒りがこみ上げてくる。

学校では既に、事件のことが知れ渡っていた。三年前に起きたこの事件の犯人はまだ捕まっておらず、真相は何一つ解明されていない。そのせいで母や祖父にまで疑いの目を向ける人もいる。

この町でも噂が広がれば、母はまた引越すと云うかもしれない。そんな余裕はもう、うちにはないはずなのに。

「……この市立図書館では年齢を理由に、利用者のプライバシーを侵害するんですか？」

しかし事務室の奥から聞こえた別の男の人の声に、私はとっさに耳をそばだてる。パタン、と本を閉じるかすかな音がした。

「侵害って、そんな」

「図書館の自由に関する宣言、第三条二項には『図書館は、読書記録以外の図書館の利用事実に関しても、利用者のプライバシーを侵さない』と記載があります」

「よ、よく覚えてるねえ……」

「また三項には『利用者の読書事実、利用事実は、図書館が業務上知り得た秘密であって、図書館活動に従事するすべての人びとは、この秘密を守らなければならない』ともあったはずですが」

低く淡々とした、少し不機嫌そうにも聞こえる声が廊下まで漏れてくる。その人が法律のような長い文章を暗記していることも衝撃だったけれど、それ以上に驚いたのは内容だ。

図書館は利用者の秘密を守らなくてはならない。そんな決まりがあるなんて、そんな世界があるなんて思いもしなかった。

あの事件が起きてから、私たち家族にプライバシーなんてなかった。地域でも学校でも、大人も子供も、皆が事件や私の家のことを好き放題うわさする。同情や正義感を露わに大きな声で話す人もいれば、好奇心や優越感を滲ませてヒソヒソと囁き合う人も。

私はどちらも嫌だった。事件のことを思い出すのも嫌だし、何も知らない人に軽々しく

触れて欲しくない。なのに世の中はなかなか事件を忘れてくれなかった。

クラスの子に私の過去を言いふらされた日から、学校に行けなくなった。けれど母や祖父たちに心配をかけたくなって、学校に行ったふりをして図書館で時間を潰していた。本を読んでいる間だけは、嫌な事も悲しい事も忘れていられるから。

私たち家族はいつまで事件を引きずって生きていかなきゃいけないんだろう。そう思うたび、どうしようもない絶望と苛立ちが目の前に立ちはだかる。

けれど――ずっと塞がっていた目の前の道がほんの一瞬、パッと開けたような気がした。「まさか館長職に就いていらっしやるあなたが知らない、などということはない」

「いつ、いやいや、もちろん知ってるよ？ でも空汽くん、それとこれとは別の……」

「いいえ館長、空汽くんの言う通りです」

うろたえる館長さんを遮るように、女性の声が出た。以前、閲覧室で気分が悪くなってしまった時に、優しく声をかけてくれた司書さんの声だ。

「館長のご懸念も分かります。ですが本人が何らかの問題行動を起こしたわけでもないのに、彼女の自由やプライバシーを侵害するのは間違っています」

「でも、でもだよ？ あの子は未成年だし、知っていて何もしないと外聞が悪いんじゃない？」
館長さんの声に焦りが混じる。やめて、と私は声には出さず呟いた。

迷惑をかけたりに焦らないから。私はただ静かに本を読んでいるだけだから、そっとしておいてくれればいいのに！

「それは誰にとつての外聞ですか？」

男の人のあまりに率直な突っ込みで場の空気が凍りついたのが、部屋の外からでも何となくわかった。

「空汽くん、さすがに直球すぎ。でも館長、確かにその通りです。その子がいくら有名な事件の関係者だからといって特別扱いせず、他の利用者と同様に扱うべきだと思います」

とりなすような司書さんの言葉に、凍った空気が少し和らぐ。

「監視するのではなく、あくまでいち利用者として見守って、こちらから干渉するのは彼女に求められた時や、トラブルや危険が発生した時だけにしましょう。それにあの年頃の子が学校に行けないというのは、それ相応の理由があるはずです。同じ年頃の娘さんがいらっしやるんですから、そういうことは館長の方がご存知でしょうけど」

「そ、そうだなあ。あの年頃の女の子は難しいからな、うん」

しどろもどろに館長さんが答える。何となくホッとしてその場を離れようとした時、「いや」と館長さんは思い出したように呟いた。

「年齢の問題じゃあないな、確かに僕が間違ってた。図書館の人間として、利用者さんに不意な干渉をしちゃいけない。知り合いにも注意しておかないとなあ」

館長さんの声がちやちやに響いてくる。がちやりと内側から事務室の扉が開き、私はあわてて物陰に身を隠した。館長さんが階段を降りて、一階へと向かってゆく。

事務室は静まり返り、暖房の音が廊下まで聞こえてきた。

「……ありがとう、空汽くん」

少し間を置いて、司書さんが男の人に声をかける。

「私は宣言の条文を引用しただけですが」

対する男の人の声はとても素っ気ない。けれどそれが、なんだか不思議と嬉しかった。

司書さんがくすりと笑うのが、かすかに聞こえた。

「もしかすると館長も寂しくて、世間話のひとつでもしてみたのかもね。ああ見えて空汽くんのこと、結構気に入ってたから」

うつ……なんだろう、男の人の名前がうまく聞き取れない。

「一年間の裏方のバイト、あつという間だったね。どうだった、この図書館は。空汽くんの図書館の参考になりそう？」

司書さんの言葉に、男の人は「そうですね」と返す。

「働かせてもらってまず驚いたのは、利用者のマナーの悪さです。館内で飲食やゲームをしたり、ソファで寝転がったり、図書館に本以外の目的で来る来館者が存外に多い」

「う、うん……」

「また壊した本を弁償するよう要求すると逆上されたり、自分の好きなマンガや雑誌が無いことにクレームをつけられたのも同じくらい衝撃でしたね。公共の図書館を本屋か娯楽施設だと勘違いしている来館者があまりに多い」

「そればかりは仕方ないね。こつちも注意するけど、色々な利用者さんがいるから……」

正直、私も驚いた。何の躊躇いもなく指摘する男の人にも同じくらい驚いたけれど。

「そうですね。色々な人間がいるからこそ、館内の秩序を維持するためには利用者がある程度制限すべきだと大変参考になりました」

「参考っていうか反面教師じゃん。まあ悲しいお話はこれくらいにしとこう」

司書さんが気まずそうに話題を逸らす。

「明日から空汽くん、一国一城の主だね。いいなあ、私立の図書館。私も定年退職したら雇ってくれる？」

「何十年先の話ですか。それに一国一城の主ではありません、オーナーは別にいます。私はしがない館長に過ぎないんです」

司書さんたちの会話に、私は首をひねった。「しりつ」の図書館——ここだって市立図書館だ。うつ……ナントカさんという変わった名前のは、他の市立図書館で館長さんになるのだろうか？

「そうなんだ。いろいろ大変だろうけど頑張ってるね、新館長さん」

ちょうどその時、五時のサイレンが窓の外で鳴り響き、私はあわてて閲覧室に戻る。

荷物をまとめて図書館を出ると、ちらちらと雪が舞い始めた。家に戻る道すがら、私は先ほど盗み聞きしてしまった司書さんたちの会話をなげなく思い出す。

不意に、胸の奥がじわりと熱を持った。

図書館とくしょくかんにいてもいい。そう言ってもらえたような気がした。

誰にも自分のことを詮索されず、自由に本を借りて読める場所。

小さな頃から、本が好きだった。将来は本に関わる仕事がしたいと、ずっと思っていた。

だったら——図書館司書になろう。大きくなったら今度は私が、家にも学校にも居

場所がない子を図書館という場所で守ってあげたい。

司書さんたちが先ほど、私にそうしてくれたように。

そんな目標を胸に秘めた十五歳の当時は、知る由もなかった。

数年後、自分が「私立の図書館」で司書として採用され、偏屈でぐうたらな変人館長のもとで働くことになることを。

